

第21回 3D教育研究会 開催レポート ーダイジェストー



日頃より、株式会社 KA 教育の教育活動にご協力を頂き誠にありがとうございます。

この度『第21回 3D教育研究会』を開催することが出来ました。

「アクティブラーニングとグループコミュニケーション」と題し、順天中学校・高等学校の高谷 哲司先生による模擬授業が行われました。また、『戦後最大の教育改革に向けて各学校のビジョンと具体的な取り組み』をテーマにしたパネルディスカッションが行われました。開催時のレポートを作成致しましたので是非とも周囲の先生方へご回覧頂ければ幸いです。

21世紀を担う生徒達にとって、『3D教育プログラム』が、少しでもお役に立てればと願う次第でございます。

今後ともよろしくお願い申し上げます。

平成 27 年 8 月吉日

株式会社 KA 教育
代表取締役 菊地 淳

第1部「講演会」

会長挨拶

3D教育研究会 会長挨拶 片倉 敦先生(順天中学校・高等学校 副校長)

本日は前回の研究会でも好評だった『アクティブラーニングとグループコミュニケーション』という模擬授業をもう一度本校の教諭であります高谷哲司先生に行ってもらいたいと思います。その後に『戦後最大の教育改革に向けて各学校のビジョンと具体的な取り組み』というテーマのパネルディスカッションを行います。各学校の先生の意見も踏まえ、どういう方向に進むべきなのかということを皆さんで考えていきたいと思います。

2月の研究会でも行いました『アクティブラーニング』ですが、現在もの凄く流行になっております。2月に行った時よりもさらに認知度も上がってきているようです。今、グローバル社会で求められる力ということで産業界から狼煙があがりました。これからは日本だけでは稼ぐことが難しくなっていきますので、国際社会で活躍できるような人材が不可欠ということになります。「創造的な学力（課題を見つけ解決できる）」を持った人材ということです。尚かつ、海外で活躍するためには「コミュニケーション能力」のある人材も育てなければならないということです。また、人間関係がしっかりとできるチームワーク力のある人材を育てて欲しいということを産業界から強く言われております。そのような中でこれまでと同じような授業形態だけでは難しいのではないかと、どういう教え方(学び方)をすれば、そういった資質が向上できるのかということを盛んに考えていきます。その一つの手段として出てきたのが、『アクティブラーニング』という手法なのです。必ずしもペアワークやグループワークを行わなくても、本人が主体的に考えるような授業になっていけば、それは『アクティブラーニング』だと考えています。今日はその本筋を授業の中で感じ取っていただきたいと思います。

例えば日能研による集計の例において、『論理的思考力や問題解決能力を身につける授業を行って欲しい』という項目に97%のご父母が賛意を示しています。また、『コミュニケーション能力を身につける取り組みを行って欲しい』というご父母が97%、『知識をつけるよりも、それを活用し考える力を身につけさせて欲しい』といった知識活用力に対する保護者のニーズが93.8%となっています。つまり産業界だけではなく、受験生の保護者からもそのような力が求められているということになります。そういう授業を行える学校が求められているということなのです。

そして『2020年問題』のように大学入試も変わります。これまでのように知識や技能も必要ですが、センター試験のような点数だけでの合格基準ではなく、思考力・判断力・表現力・主体性・多様性・協働性といったものを盛り込んだ入試基準に変わっていきます。既に大学も少しずつ変わっていますので、これまでのような授業の行い方や知識偏重型の授業では大学の合格率も伸び悩んでしまうのではないのでしょうか。ですから、私たち教員は先に勉強をして用意しておくことが大切です。

今日は皆さまで有意義な時間を過ごしていただきたいと思いますので宜しくお願いします。



高谷 哲司先生(順天中学校・高等学校)

- 3 -

■授業中の先生方の様子



【授業の流れとポイント】

①導入

オープンクエスチョンからの問題意識の共有
(現実の政治はどうだろうか?)

②展開(1)

問題点の提示・・・今の現実、日本の国民主権のあり方としてどうだろうか?

③展開(2)

じゃあ、どうすれば? 選挙が大事。

④まとめ

でも、自分の意思で投票するって、難しいね。だから、もっと学ぼう。
そのとき、自分は主権者?

今の授業について社会科の先生は分かると思いますが、あまり教科書や資料集の知識をあまり使っていません。単元としては『国民主権(2)』なのですが、『国民主権(1)』で「象徴天皇制」等を行います。実際の授業ではこの前段階で「多数派の暴政」や「小数意見が尊重されるための仕掛け」「公聴会」「委員会」「違憲審査」等の授業を行ったうえで今日の流れに入っています。

本日はどうもありがとうございました。

質疑応答

◎前段階の授業というのは講義形式で行われるのでしょうか？それともこのようなペアの形で行われるのでしょうか？

ペアで2分間の話し合いは良く使います(50分授業で3～4回)。生徒が「えっ？なんだろう？」と思うようなことやオープンクエスチョンは良く行います。

◎ペアワークではなくグループワーク形式の場合、今回の授業の中だとすればどの部分がポイントになるのでしょうか？

凄く難しく、皆が皆の意見を聞きたくなるような内容じゃないとグループワークは機能しないので、この授業の場合ですと、自分が本当に考えて投票したこと、あの人はどういう意見なんだろう？というのが一番話に取っ付き易いかなと思います。例えば「話し合いをしてどれか一つ政党を決めてください」でグループワークを行う場合も機能する可能性もありますが、予備知識の無い生徒たちで4人1組になってしまった場合難しいと思われますので。

◎グループやペアの決め方などは何かありますか？

まずペアは隣同士で行います。グループも3～4人1組で行います。ペアワークやグループワークで一番難しいのは、例えば彼氏彼女の関係の生徒が別れた時や友達同士でやや気まずい関係になっている時などは、空気を察知して敢えて行わない場合もあります。



パネルディスカッション

『戦後最大の教育改革に向けて各学校のビジョンと具体的な取り組み』

これよりパネルディスカッションを行います。新指導要領のことについて何を教えるかだけでなく、どのように教えるのかということが問われるようになりました。教育産業も巻き込み大きな騒ぎとなっていますが、各学校ではどのような考えや取り組みを行っているのかというのをお聞きしたいと思います。また、育成すべき資質能力ということで、どういう能力や資質を中学・高等学校段階で育てなければならないか、また、力をつけるために学校側ではどういうことに取り組まなければならないのかということを、各学校の先生方に私からお聞きしたいというのが今回の内容になります。

他にもどういう評価をしていくのか、高大接続や入試改革をどのようにお考えなのか、というようなこともお聞きしたいと思います。

片倉 敦先生(順天中学校・高等学校 副校長)

コーディネーター

片倉 敦先生(順天中学校・高等学校 副校長)

パネリスト

安達 毅先生(大森学園高等学校 教頭)

塩谷 耕先生(京華中学校・高等学校 校長)

樋口 元先生(京華女子中学校・高等学校 教頭)

鶴田 克彦先生(駒場学園高等学校 進路指導部長)

高野 淳一先生(東京学園高等学校 副校長)



自己紹介



安達 毅先生(大森学園高等学校 教頭)

本校は高校単独校で普通科と工業科を併せ持つ学校です。グループコミュニケーションに関しては随分以前より導入しており、コミュニケーションの向上や考える力、語彙力を向上したいというのがきっかけです。先ほどの授業もそうでしたが、それぞれが頭を使い、アクティブに考えるということが効果的だと考えております。



塩谷 耕先生(京華中学校・高等学校 校長)

本校は男子校ということで、ディスカッションや発表が苦手な男子がたくさんいます。10年以上前よりグルコミを行っています。正直あまり本気ではありませんでした。ところが今回の『2020年問題』を契機にして、少し変えていかなければならないと思っています。2006年に国が社会人基礎力というものを打ち出し、いわゆる5教科以外の部分で主体性や考える力、チームワーク力を高める行事や探究型の授業を行ってきました。

ですが今回の改革に関しては5教科の中でも行わなければと感じます。色々な部分でこれから検討しなければと思っています。

**樋口 元先生(京華女子中学校・高等学校 教頭)**

一昨年まで京華中高の方に31年在籍していましたが、昨年は京華学園の法人側の方にいました。そしてこの4月より女子校へ異動となりました。グルコミ等の授業は男子校の時代(グルコミやアクティブラーニングといった言葉が世の中でほとんど認識されていなかった時代に)導入しました。定着するまでは長い紆余曲折もありましたが、そこからさらに発展させ探求型の授業を行ってきました。現在の女子校では残念ながら導入していませんが、ICT教育やEHD教育というものも取り入れ、さらにお琴や着付け、華道、茶道などの授業も行っています。

**鶴田 克彦先生(駒場学園高等学校 進路指導部長)**

本校は大森学園さんと同じように高校単独校です。2年前より『推薦に頼らず一般入試による大学受験で進学実績をあげよう』といった大きな学校改革を実践し、何とか少しずつ進学実績が伸びてきたという状況です。若い先生が多く入ってくる中で、若い先生たちを前面に出しながら学習指導にあたっていただくというような感じになってきています。私は進路部長という立場で、やはり生徒に接していないとそういった部分は見えてこないの、若手の先生にアドバイスする際にも経験値を踏まえた上でのアドバイスをさせていただいています。ICT教育の取り組みとしては、Wi-Fi環境を整え、タブレットやスクリーンを使用した学習も行っています。

**高野 淳一先生(東京学園高等学校 副校長)**

エゴグラムとグループコミュニケーションは私が進路指導担当をしている時からですので、10年以上のお付き合いになります。そもそもの目的は、通常の授業に手詰まり感もあり、生徒が能動的・主体的に関われるような取り組みを探していた時にこのプログラムと出会いました。本校は高校単独で男子校です。一昨年の夏に河合塾と提携となり、その時に出てきたプランが中高一貫共学化ということで、海外大学への進学を中心に考えるというような、現在の状態とは非常にかけ離れた案が出ています。現状とこの先と大きく変わっていく学校の中で、今自分に何ができるのかと考えており、変わらないものは教師としての力、特に授業を展開する力だと思います。アクティブラーニングに関しても、昨年校内で取り組むグループができ、有名な講師を招いての研修や他校への見学など、情報を集めながら教員研修に力を入れております。



フ リ ー ト ー キ ン グ

- 片 …… 片倉 敦先生(順天中学校・高等学校 副校長)
- 安 …… 安達 毅先生(大森学園高等学校 教頭)
- 塩 …… 塩谷 耕先生(京華中学校・高等学校 校長)
- 樋 …… 樋口 元先生(京華女子中学校・高等学校 教頭)
- 鴫 …… 鴫田 克彦先生(駒場学園高等学校 進路指導部長)
- 高 …… 高野 淳一先生(東京学園高等学校 副校長)



- 片 新指導要領について、どのくらいの時期から本格的に行いますか？3年後ですか？5年後ですか？
- 塩 2020年問題に関して少しずつ姿が見えてきたところなのですが、実際には平成29年度生からある程度スタートしないと、その生徒たちがもし一浪した場合に直面することになります。平成30年度に入ってくる生徒には完全に対応しなければなりません。カリキュラムも変えなければならぬですし、授業形態も変えなければならぬので、今年度中にはある程度コースや授業の見直しも含めて決めていきたいと思っています。ICTに関しても早めに動かなければならないと思っています。
- 片 2020年だからまだ良いのではないかと、いうのではなく、入学生が2020年度に卒業する時に、間に合うようにしなければならないという話ですね。そうすると再来年から大幅に変えなければならないということですね。そこは私も全くの同意見です。
- 鴫 実は本日、学内で私と教務部長と進学研究部長の3人で2020年問題について2時間程度の会議をしました。本校は高校単独校ですので、中高一貫校よりは少し時間はありますが、まずカリキュラムの変更、コース制の内容の変更、そしてコンセプトを明白にして募集にあたりましょうという話をしました。この夏休みに各々が案を考え、夏の終わりに話を詰めましょうという段階です。ですので、今まさに動き始めたという状況です。
- 塩 実際には2016年度入試、四国の高知大と徳島大ではもう始まっています。例えば徳島大ではセンター試験300点、調査書、志望動機書、学びの設計書、集団討論、集団面接など600点です。センター試験以外に次を求める学校です。四国の5大学連合が完全に前倒しで行っている状況です。
- 樋 話の角度は変わりますが、日能研の勉強会に行った際に、以前の入試問題の解答用紙と今年の春に実施をした入試問題の解答用紙を比較したところ、大幅に変わっていました。記述で解答しなければならない箇所が非常に増えています。中高一貫校の場合は少し違いますが、やはり変わってきている印象があります。塾も色々なことに対応すべく、色々なことを打ち出しています。その子たちに出す入試問題も私共側はそのように作り変えていかなければならないのかなと感じます。

- 片 皆さまの学校では、どういう力をつけさせたいと考えていますか？
- 高 情報を分析する力ですね。分析した上で自分で考えてそれを表現するといった力をつけさせたいと思っています。今の生徒にもそうですが、例えば短い論述問題を定期試験で入れたり、授業の中で論述問題に対し、どう解答するのか(方法や手順)というの折り込むようにしています。
- 鴉 本校の場合ですが、大学側が示している『思考力・判断力・表現力』の前段階での『知識・技能』の部分が足りないようです。知識が無いゆえに思考できない、判断できない、表現できないという現状ですので、その部分をどのように維持しながら、且つ『思考力・判断力・表現力』更には『主体性・多様性・協働性』へ持っていくか。本校くらいの学力レベルの学校だと、それを全て授業で行うということができないと思います。つまり授業では『知識・技能』からのちょっとした応用力(論述、論理的な思考)の部分までが、現状では限界なのかなと思います。5教科以外の時間を使いながら思考力や表現力を磨いていく必要があると思います。
- 樋 生徒の基礎学力は勿論大切ですが、先生方にどこを意識して授業を行ってもらうか、ということだと思います。基礎学力のテストでは良い結果であっても、それをどのように応用していくのか、という部分がまだまだのように感じますので、そこを教員がどのように導くかが大きな要素になっていると思います。
- 片 センター入試的なものも、例えばS1、S2、S3、A1、A2、A3みたいになり、それプラス何か、みたいになっていくのではないかと思います、その辺はどうお考えですか？
- 樋 推薦と一般の垣根が無くなると思います。推薦というものが無くなり、学力試験+何を持っているか、ということになると思います。両方を持っていないと大学に行けないという時代に近づいていくのではないかと思います。そのスピードがどのくらいかは分かりませんが、2020年はポイントになっていくだろうと思います。
- 片 もしかすると従来の学力だけの入試も残りつつ、色々な入試パターンがでてきて多様化するのではないかと思います、どうでしょう？
- 安 ある程度の学力もしっかりしていて、さらにプラス α を求めて真剣に入試を行う大学というのはどれくらいになると予想されますか？
- 片 SGU(スーパーグローバル大学)に選定された大学は、だいたいMARCH以上の大学となっています。おそらくその辺りのレベルから上の大学は、そういったことを求めていくことになると思います。また、そこで大きな2極分化というのが起きてしまって、そういったことができる大学と、従来通りの入試を行う大学とで別れる可能性もあるでしょう。あとは、大学の中で定員割れした場合に方法を変えて入学させるということもあると思います。

塩 推薦と一般の垣根が無くなるということで、例えば、生徒が色んな活動をして実績を得た場合や色んな検定を取得した場合に、それを先生がまとめて提出をしなければ合格できないということになってくると考えられます。担任が変わっていく中で、それをどのようにしてデータとして残していくのか。例えば、海外に留学した生徒がどんな成績をとって、どんな活動をしたのかというものもデータとして残しておくなければなりません。やはりこういう場面でもICTが活用されると思います。現在色んな学校で取り入れている“Classi（クラッシー）”というツールがありますが、これは全部そういったデータの蓄積が可能なのです。小テストをメール送付することも可能ですし、採点も一瞬で終わり、自動的に解答が配られるといったことが可能ですが、それ以外に活動の蓄積ができ、それを共有できるといったシステムもありますので、そういうものを活用していかなければ、色々な入試に対して教員側が大変になってくると思います。つまりICTを活用すれば教員の負担も軽減されるでしょう。色んなことが今は教員に求められる大変な時代ですので、少しでもICTを活用して負担を抑えられればと考えています。

これだけ日本人に弱い力が求められていますので、そこを磨いていくのが本校の方針になってくると思います。いかにして基礎学力をつけさせつつ、それ以外の力というものも伸ばすという大変なことで、教員側も少しでも負担を軽減できるように工夫が大切だと思います。

片 学力も上げながら他の力も上げるということになりますが、それは教科の中で行っていくのでしょうか？それとも総合学習の時間の中で行うのでしょうか？

塩 授業の中でも行わざるをえないと思います。先ほどの高谷先生の授業もそうでしたが、ただアクティブラーニングする訳ではなく、生徒の頭を回転させて、次にもっと勉強しようと思うような授業でしたので、そういった授業を取り入れながらになります。また、学校の中だけで行うのは難しいと思いますので、自宅学習にも力を入れなければなりません。そこでICTを活用することになると思います。

樋 先程、安達先生が“上位の大学は基礎学力を確保した上で色んな能力を求めてくるようになる”とおっしゃってましたが、私は逆に中堅の大学が名乗りを挙げていくと思います。基礎学力で合格者を出していく部分とミックスの部分で合格者を出していく部分の2点に分けていって、両睨みで合格者を確保するのではないかと思います。やはり大学にとっても、これは一大チャンスと捉えているところが多いと思います。

片 現在、高大接続と入試選抜の改革が行われていますので、その改革に合わせた話になっていきますが、それが2020年くらいから大幅に変わるだろうと言われています。大学が変わるということについて、本気度はどの程度なのか？入試のアドミッションポリシーは本当に変わるのだろうか？その辺りを先生方はどのようにお考えですか？

鵜 進路指導担当をしています。まだ良く分からない点も多いです。例えばアドミッションポリシーを読んでも（求める学生の）理想論がちょっと先走っているように思えます。言い方は悪いですが、偏差値の低い所でも凄い理想論を掲げてあるので、その辺がまいちしっくりこないですね。

片 国からアドミッションポリシーを掲げなさいとルール化されているので、これに関しては大学自体もまだまだ理解しきれていない状況だと思います。

センター入試プラス α の部分を求める大学と基礎学力試験だけで良しとする大学の2つに分かれてしまっているのではないかという懸念もありますが、そのあたりはどうでしょうか？

鴫 これまでのように推薦入試を行う大学もあるのかもしれませんが、中堅以上の大学であれば、恐らく基礎力ではなく評価テストの方を行うのではないかと思います。

片 大学によって、基礎学力テストは受けても受けなくても良しとし、学力評価テストも受けても受けなくても良しというようになりつつありますが、そのあたりはいかがお考えでしょうか？

塩 基礎学力テストに関しては上位の高校生はまず受けないと思いますし、中堅より下の高校生しか受けないと思います。AOや推薦に適用する学校は定員をなかなか確保できていないような大学になると思いますし、ポリシーの全くないAO入試もまだまだ残っていくのではないかと思います。

片 現在、大学はどちらかというとアドミッションポリシーもそうですが、ディプロマポリシー(卒業認定)を厳しくしようと掲げています。日本では、入学すれば90数%の人が卒業しますが、アメリカでは60数%、OECDの平均でも70%くらいの人しか卒業できていない状況です。卒業させないという訳ではなく、大学で非常に勉強させているのです。そこで勉強しない人は留年や退学させています。ところがアメリカでは再チャレンジが出来るので、平均年齢が30歳を超える大学がほとんどのようです。一度社会に出ているので必死に勉強するのです。そしてその再チャレンジの人たちと一緒に勉強しなければついていけないので、皆が必死に頑張るのです。

同年代でいて同カルチャーで同じような考え方をもち甘い内容になっているのが日本の大学であり、本当に大学がディプロマポリシーを変え、6割程しか卒業させないようになるとどうでしょうか。そうなった場合、安易に“大学に合格させれば良い”というだけの施策で高校が進路指導して良いのかということなのです。あまりにも無責任だと感じます。進学率は悪くなるかもしれませんが、色々な力を身につけることが生徒にとってハッピーなのではないかと思うのです。進学率で競う時代はもう過ぎたのではないかと思います。卒業する時にどういう生徒になり、また社会人になりどういう活躍をするか、そういう部分で競う時代になってきていると個人的には思うのですが、皆さんはどう思いますか？

鴫 出た大学ではなく、何が出来るかというのが世の中的には求められていると思います。ただ、保護者が中学や高校を選ぶ場合、有名大学にたくさんの生徒を輩出している学校に安心感を持っているのが現状です。ですので、中高の広報も進学実績に加え、『こんな卒業生がこんな活躍をしています』と打ち出すのも良いと思います。そしてそれが有名大学でないほうが、保護者によりインパクトを与える気がします。進路指導においても、“大学ではなく何がやりたいか？”“自分の今の力で出来そうな大学はどこか？”という指導を行っています。

- 塩** 偏差値ではなく、本気でグローバル人材の育成に取り組んでいる大学を薦めるようにしています。本気で頑張るとなると、やはり留年率は高くなってきます。例えば東京理科大のように平均卒業年数が5.8年という例や立命館アジア太平洋などは卒業するまでに3～4カ国語を話せる学生が出てくるなど、そういった価値のある大学を選ばなければならないと思います。ですが実際大学の半分くらいは、それを行うと生徒が集まらないということですが……。変わらない部分もありますが、中等教育にこれだけの教育を期待するのであれば、大学側にも変わって欲しいと思います。
- 安** 保護者の方にとって実際はどうなんだろうというのは良く考えます。まだまだ現状では大学の名前で決めるという文化も残っているように感じます。
- 片** 中学入試をさせる保護者は割合、未来を見据えているように思いますが、そのあたりの温度差が高校単独校と中高一貫校の多少異なる部分でもあるのかもしれない。
- 樋** 中身を見ている保護者も多くなっているとは思いますが、一方で大学の偏差値に変わる何かしら分かりやすい“ものさし”ができないと、なかなか一般の方には見えない部分も多く、有名な名前の大学に流れてしまうのかなとも思います。ただ本当にこのように入試が変わっていくのだとすれば必ずしも偏差値では測れなくなっていくでしょうし、偏差値に変わる良い“ものさし”ができればと思います。
- 片** 大学の入試改革の本気度によって、中高の進み方も大分変わってくるのではないのでしょうか。要するに高校の教育というのはやはり大学入試を見据えながら動いているのだということですね。国を揚げて本気で行うのだったら、大学側が変わらなければ中高は変わらないというのも1つです。現在、大学改革というのが相当締め付けがあるということも耳にしています。そのあたりの内容はもう少し情報が明確になった時に進路の先生方を交えて話をしたいと思います。

質疑応答

- Q** 冒頭、塩谷先生の話の中で『探求型』という言葉がありましたが、具体的にどのようなことを取り入れられているのでしょうか？
- 塩** 中1～3年と高2の進学コースで週に1回、調べ学習とグループディスカッションを行います。最終的に文化祭で発表するという形です。
中1では自由なテーマでの探求、中2では“アジアについて考える”等のテーマで探求します。中3では“未来”というテーマで、将来の進路について調べ学習をし発表するという内容です。高2になると大学入試を見据えた“進路探求”という形で毎週、議論や発表を交えて行っています。
行事としては“イングリッシュキャンプ”（英語のみを使用した国内留学）を行い、そこでは英語力を伸ばすことよりも、積極性をより与えていきたいという思いがあります。また、マレーシア研修旅行では同じ中3の生徒同士で交流をさせ、語学の幅広さ（マレー語・中国語・英語）に刺激を受けさせるという目的があります。試行錯誤で交流することにより自信をつけさせるという部分を重要視しています。

Q 公立の中学校でもこういう方向性へ動き始めているのでしょうか？

片 公立の中でも中高一貫校では結構動き始めているような気がしますが、公立全体が動いているという話は聞きませんが、一部の学校ではルーブリック評価法なども取り入れ、動きだしているのと聞いています。

Q 新しい方向性の授業を教員側が展開しなければならなかった時に現場では大変になると思いますが、それをどのように横に広げていくのか？一部の先生だけで行ったとしても、これは難しいことですので、実践されていることなどありましたら教えてください。

高 始めたばかりではありますが、本校ではお互いの授業見学を定期的に行っています。仲間内でどのような授業を行っているのか、それがどのような効果をもたらすのか、というのを検証しています。昨年、お互いの目線を揃えるために、授業のどこを見るのか、という研修会を行いました。それを踏まえた上での授業見学、さらに授業を行った先生に他の授業を見学してもらい、第三者的な評価をしてもらうといったことです。そして放課後にその日の授業の講評会を開き意見を出し合うというようなことを行っています。

また、アクティブラーニングやICTなどの新しい流れにどのように対応するか、というテーマの勉強会が教員の中から自主的に立ち上がりました。そうした一連の動きの中で分かってきたことは、ベテランの先生でアクティブラーニングを行ったことがないという方々の中に、実はアクティブラーニングで活かせる技術があるということが最近分かってきました。そのあたりからまた広がっていくのかなと感じています。

鴉 私から皆さんにお聞きしたいのですが、中堅と呼ばれている世代(30代)の先生で、苦労して自分の授業スタイルを築きあげ、自信に溢れているような先生からすると、例えばICTの導入やアクティブラーニングといった言葉に拒否反応を示すのではないかと。実際本校にもそういう先生がいます。そういう先生にはどのように水を向けるのが効果的なのでしょうか？

本校は逆にベテランが少し居て、あとは若手ばかりです。なので中間層が少ないですが、やはり学校全体として動きだせば、そういった先生も吞まれてくるのではと思います。例えばアクティブラーニング以外にも色々新しいことを行っていますが、全体で大きな流れを作ってその中に先生たちを吞み込んでいくといった感じです。

高田 雅秀先生(日出中学校・高等学校)

本校では、そもそもアクティブラーニングとは何なのか？ということ定義するところから始めました。そういう中で本校の授業研究プロジェクトで“アクティブラーニング＝生徒が意欲的に学習をしている状態”と定義しました。従って意欲的に学習をしている状態ならば、グループワーク時でも先生の話に集中している時でも、それはアクティブラーニングということです。研修会では年代の異なる先生方で、授業の盛り上がる時、授業で辛い時などの情報をシェアし、ディスカッションを行いました。まずは、偏見を解くところからスタートをすれば良いのではないかと思います。 高谷 哲司先生(順天中学校・高等学校)

片 また、何かの時にこういったパネルディスカッションの形で行えればと思います。今日は先生方にお集りいただき、どうもありがとうございました。

参加者全員での記念撮影



2015.7.11 第21回 3D教育研究会 in アルカディア市ヶ谷

出来る・大丈夫・大成功

3D教育研究会

2015.7.11 第21回 3D教育研究会 in アルカディア市ヶ谷

株式会社K A教育

〒173-0012

東京都板橋区大和町12-12

03 - 6784 - 7675